

序『カラム』の時代Ⅲ

マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計

坪井 祐司

本論集¹は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム(Qalam)』について、テーマごとに掲載記事を紹介する研究ノートをもとめたものである。以下では、まず『カラム』誌について簡単な紹介を行ったうえで、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の各論の内容を紹介する。

なお、この本編は『カラム』を利用した共同研究における論集の三編目にあたるものである[山本編2010][坪井・山本編2011a]。このため、『カラム』誌およびプロジェクトの紹介については、それぞれの論集の序論と重なる部分があることをあらかじめおことわりしておきたい。

1. 『カラム』について²

『カラム』は、1950年7月にシンガポールにおいてアフマド・ルトフィ(Ahmad Lutfi)により創刊され、ルトフィの死去により1969年10月を最後に停刊するまで228号が発行された。この20年間という発行期間は、創刊後1、2年で停刊となることがめずらしくなかった当時のマレー語雑誌としては長命なものといえる。

『カラム』の特徴は、その記事が一貫してジャウィ(アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法)によって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム化とともにアラビア文字を使用したジャウィが主流となった。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定められ、行政や教育の場で使用されるようになると、徐々にジャウィはとってかわられていった。旧オランダ領(現インドネシア)地域では20世紀初頭以降、旧イ

ギリス領(マラヤ、シンガポール)でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウィからローマ字表記に切り替わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウィ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

このことは、『カラム』では国境を越えた東南アジアのムスリムの紐帯が意識されていたことを意味する。シンガポールで発行されていた『カラム』の主な読者はシンガポール、マラヤ在住者であったが、執筆者のなかにはシンガポール、マラヤだけではなくインドネシアのムスリム知識人も含まれていた。このため、インドネシアやその他東南アジアのムスリム社会の情勢を含む幅広い内容の記事が掲載された。さらに、エジプトなど中東で学ぶ留学生も寄稿しており、中東のイスラム思想を積極的に紹介した³。

『カラム』のさらなる特徴は、この地域の他の定期刊行物との交流である。『カラム』の記事のなかには、他の刊行物に掲載されていた記事が転載されたものもある⁴。また、英語も含めて新聞・雑誌記事などを引用し、それに対して論評を加えたものもある。このため、『カラム』をみることで、単に同誌の主張というだけでなく、当時のこの地域のジャーナリズムの世界でなされていた議論のあり方や内容をうかがうことができる。

以上の特徴をふまえると、『カラム』は当時の東南アジアにおけるムスリム知識人の思想が強く打ち出されたものといえよう。『カラム』が刊行されていた1950年代、60年代はマラヤ(マレーシア)、シンガポール、インドネシアにおける独立および国家建設の時期である。この時期に関しては、それぞれの国民国家

1 現在学術用語としてはイスラームと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本稿では現地の発音に即してイスラムと表記する。ただし、以下の各論において用語の選択は著者にゆだねられているため、表記が混在する結果となっていることをあらかじめお断りしておく。

2 『カラム』誌については、[山本2002a]が詳細な紹介を行っている。

3 編集者アフマド・ルトフィが1956年にシンガポールのムスリム同胞団を結成すると、『カラム』編集部は事務局となり、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった。

4 本論集では、光成論文がそうした引用記事に言及している。

の建設に関心が集中していることもあり、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の動向には焦点が当てられてこなかった。しかし、『カラム』からは、当時のムスリム知識人がこれらの国々が独立国家となっても、互いの政治情勢を観察し、さまざまな形で国境を越えたムスリムの連帯を模索していたことが明らかになる。

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界のムスリム知識人の思想や活動を明らかにする上で貴重な資料である。しかし、これまで『カラム』は十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

以上の認識のもとで、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、『カラム』を収集して一つの資料として集成したうえで、記事の見出しおよび本文をローマ字に翻字してデータベース化し、一般公開して研究のための便宜を向上させることを目的としている。

2. 『カラム』プロジェクト

本プロジェクトは、『カラム』誌の記事のローマ字翻字、同誌に関するデータベース作成などからなっている。ここでは、プロジェクトのこれまでの成果と今後の方向性についてまとめてみたい。

(1) 『カラム』雑誌記事データベース

プロジェクトの基礎となる資料である『カラム』は、山本博之により収集された。山本は、シンガポール国立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書室における資料収集により、『カラム』全228号のうち212号を収集した。そして、京都大学地域研究統合情報センター（以下京大地域研と略記）が進めている雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として、『カラム』紙面をデジタル化し、それぞれの記事の見出しのローマ字翻字を関連付けする作業を行った。これにより、ローマ字による記事見出しの検索により当該紙面を呼び出すことができるデータベースが作成され、一般に公開されている⁵。

(2) マレー・インドネシア語文献総合データベース

この『カラム』誌記事データベースは、他のマレー・インドネシア語文献のデータベースと接合することにより、2つの方向へと発展することが望まれている。

第一に、『カラム』以外の資料を含めたマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。地域や時代を越えた記事の横断的な検索は、マレー・インドネシア語定期刊行物の研究には重要である。マレー・インドネシア語雑誌は短期間のうちに停刊となるものが多いが、同じ編集者や執筆者が別の雑誌を立ち上げることもめずらしくない。くわえて、その内容においても、雑誌の枠を越えた引用や論争が行われてきたため、複数の雑誌を一つの言論空間、資料群としてとらえる必要がある。このため、京大地域研の雑誌記事データベース・プロジェクトでは、刊行期間が長いマレー・インドネシア語定期刊行物を収集し、誌面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベース作成を進めている⁶。

もうひとつは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコダンスプロジェクト（以下 MCプロジェクトと略記）との連携である⁷。MCプロジェクトでは、主に20世紀以前の王統記を中心に本文テキストをローマ字化したものをもとにコンコダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学は1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果を MCプロジェクトと接合することが計画されている。これに1950、60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースを接合することで、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を包括した統合データベースを構築することができよう。

(3) 「ジャウィ文献と社会」研究会⁸

「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の1つである。「ジャウィ文献と社会」研究会は京大地域研の山本博之研究室に事務局を置いており、2009年度には京大地域研の萌芽研究「マレー語雑誌『カラム』データベースを利用した研究」(2009年度、研究代表者：山本博之)と合同で研究活動を行った。さらに、2010年度はその後継プロジェクトである

5 データベースは、以下の URL を参照されたい。 http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM

6 京大地域研でデータベース化を進めている雑誌の詳細については、[山本編 2010: 6] を参照されたい。

7 詳細については、プロジェクトのホームページを参照されたい。 <http://mcpanueduau/Q/mcp.html>

8 「ジャウィ文献と社会」研究会の詳細については、ホームページを参照されたい。 <http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/yama/jawi/>

京大地域研の共同研究「脱植民地化期の東南アジアにおけるムスリム社会の動態」(2010～11年度、研究代表者：坪井祐司)と合同で研究活動を行っている。研究会の主たる活動内容は、『カラム』記事本文のローマ字翻字、一般向けのジャウィ文献講読講習会、『カラム』を使用した研究の三点である。

このうち、記事本文のローマ字翻字は、前述のデータベース構築に関連するものである。『カラム』雑誌記事データベースは、現在のところローマ字による記事見出しの検索にとどまっており、記事本文の検索はできない。記事本文のローマ字翻字を行うことで、本文も検索の対象とすることができるようになり、MCプロジェクトとの接合も可能となる。このため、2009年から「ジャウィ文献と社会」研究会のメンバーによる『カラム』の記事本文の翻字作業が開始された。現在は、参加者が自らの関心に沿った記事を選んで翻字を行う形態をとっている。さらに、2011年度からは京大地域研の地域情報学プロジェクト(雑誌データベース班)による『カラム』記事のローマ字翻字が開始されており、本研究にて行っているローマ字翻字とあわせて『カラム』記事のローマ字化が進行している。

ジャウィ文献講読講習会は、参加者を一般公募する形で行うものである。これは、日本においてジャウィを学べる機会を提供することと、一般に開かれた活動をすることでジャウィに関心を持つ研究のネットワークを深化させることを目的としている。講習会は2009年以来年1回行っており、2011年度は地域研究コンソーシアムおよび日本マレーシア学会との共催により、2011年10月15、16日の2日間に、日本で唯一のマレーシア語専攻を有し、ジャウィをカリキュラムに組み込んでいる東京外国語大学にて開催した。開催にあたっては同大学のファリダ・モハメド講師の全面的な協力を受けた。この場を借りて感謝の意を表したい。

それとともに、研究会では講習会のためのテキスト『ジャウィを学ぶ』を編集した[坪井・山本編2011b]。これは、ジャウィの読み方・綴り方を解説した[山本2002b]を採録したジャウィ講読の初級編、『カラム』記事から引用した講読テキスト、近代におけるジャウィの定期刊行物(ジャウィ・プラナカン、アル・イマムなど)の実物を掲載し、その解説を行った「さまざまなジャウィ文献」、研究会メンバーが各自の専門分野におけるジャウィ資料を紹介・解説した「資料編」からなっている。講習会は20名をこえる参加者を集め、あ

らためてジャウィに対する関心の高さが示された。

『カラム』を利用した研究活動は、メンバーがそれぞれの問題関心に基づき『カラム』の記事を検討するものである。共同研究では年に3回程度の研究会を開催して議論を行っており、その成果としてまとめられたのが本論集である。ディスカッションペーパーは2009年以来年1回発行されており、これが3編目となる。その内容について次節で紹介したい。

3. 本論集の構成

本論集は、研究会のメンバーが『カラム』の記事本文のローマ字翻字の作業を通じて得られた考察をまとめたものである。翻字プロジェクト参加者は、各自の関心に基づき記事を選び、翻字作業を行っているため、全体としての統一的な対象時期やテーマが存在するわけではないが、本論集ではおおむね各論のテーマの年代順に以下のような構成となっている。

國谷徹「近代イスラームにおける家族像——連載記事「女性の世界」の分析から」

國谷は、イスラーム近代主義のウラマーによる連載記事「女性の世界」をとりあげ、その家族、女性観を論じた。20世紀以降、婚姻や家族といった家族法の分野に国家からの圧力が増し、西洋近代的知識人からはイスラームの諸制度が男女差別的と批判された。『カラム』はこれに反論し、近代ムスリムの家族のあり方を示そうとした。妻の夫への不服従への処罰と多妻婚という二つの論点をめぐり、これらの慣習が男女相互の義務と権利を定めた規定の一部であると主張した。一方で、人間個人の弱さを強調し、女性に自由と権利を与えると秩序ある家庭生活が維持できないとして、夫が妻を庇護するイスラームの家庭法の規定を正当化した。この論説は、宗教の倫理・道徳的役割を強調しつつ近代化を志向するイスラーム知識人の思想を示す。同時に、個人でなく家族を基盤とし、男女の性差と役割の違いを前提とする点で西洋近代的な価値観との根源的な対立を示している。

坪井祐司「1950年代前半のマラヤ情勢とアフマド・ルトフィ」

坪井は、1952、53年における『カラム』の主筆アフマド・ルトフィの言説を取り上げた。この時期の彼のマラヤに関する論説は全体の政治状況を離れ、イスラ

ムの行政的地位や管轄に焦点を絞ったものであり、既存のウラマーを批判しつつイスラムの制度化を進めること、UMNOに代わるイスラム組織を結成することを提言した。これは、イスラムの制度化を通じて自らの独自性、影響力を確保しようとする戦略であり、多民族社会のなかでイギリスや他民族との交渉によりマレー民族のシェアの拡大を目指すマレー・ナショナリズムとは対照的なアプローチであった。しかし、国家、社会秩序のなかに自らの集団を制度化していく方向性は共有されていた。『カラム』では同時期にマレー・ナショナリズムに近いコラムも掲載されており、二つの主張を併存させた。そこにイスラム主義の理想を掲げつつも常に変化する現実の状況に対処しようとした『カラム』の戦略がうかがえる。

山本博之「エジプト留学生が論じた マレー社会の再建——ズルキフリ・ムハンマドにみる 1950年代のマレー人知識人の思想の系譜」

山本は、『カラム』とエジプトを結んだ人物の一人として、留学先のエジプトから『カラム』に寄稿し、帰国後には新設されたイスラム・カレッジの教員を経て汎マラヤ・イスラム党(PAS)の幹部となったズルキフリ・ムハンマドの論説記事を取り上げた。エジプトの二つの大学で英語とアラビア語のそれぞれで学んだズルキフリは、イスラム教だけでなく、英語を介して教育学や社会学や心理学といった学問を身につけた。ズルキフリの関心は、宗教のための宗教ではなく、時代の変化に対応しながら人々の日々の暮らしをよくしようとする方法であり、イスラム教は、文化と教育の両方の側面でマレー社会の立て直しに有効であると位置づけられている。

金子奈央「マレー・コミュニティにおける 国民教育制度に関する議論」

金子は、1950、60年代に形成されたマラヤの国民教育制度をめぐる議論を取り上げた。『カラム』の教育に関する議論はイスラム教育に関するものが大半で、国民教育は否定的にとらえられがちであったが、国家制度としての公教育が成立していくなかで、現実には教育を受けるマレー人子弟にいかなる環境を整備すべきかという視点からの議論もなされた。マレー人が英語教育を受けることを重視し、マレー語学校を廃止すべきという提言がなされたのに対して、マレー語教育を重視すべきという反論がなされた。な

かには、マラヤが独立すればマレー語が国語となることを指摘し、現状のマレー語教育の改善を訴えるものもあった。この論争は教育制度における従来の各民族の民族語別学校の位置づけをめぐる議論の最中になされたもので、将来の独立国家におけるマレー語の地位もにらみながら、国民教育のなかにマレー語教育をどう位置づけるかという議論であった。

光成歩「1950年代「強制婚」論議にみる カラム誌の改革論理」

光成は、父(後見人)が本人の同意を得ることなく娘の結婚を取り決める慣習である強制婚をめぐる議論を取りあげた。『カラム』はイスラム法の法制化をめぐる議論では男性の権限縮小に強く反対したが、この問題では後見人の権利の行使は女性の同意を必要とするという立場をとり、女性の権利を擁護した。『カラム』の批判は、身分に差がある婚姻を無効とし、強制婚を認める当時のウラマーに対するものであり、ムスリムにおける階級の否定という当時の平等を志向する価値観によるところが大きかった。一方で、イスラム法における後見人による婚姻の取り決め自体は一概に否定されることはなく、西洋教育を受けた層からの批判に対しては逆に反論した。婚姻に際して女性の同意を得ることが平和な家庭を築き、紛争を防ぐことにつながると考えられており、法の問題というよりもその運用や道徳的な側面に解決点を見いだそうとしていた。

4. 『カラム』の時代

各論考はいずれも限定された資料をもとにした試論であり、当該時期の社会全体への位置づけについては今後の検討課題となるであろう。ここでは、暫定的なまとめとして、これらの論考から浮かび上がるシンガポールを中心とするマレー・ムスリムにとっての1950、60年代という時代性について簡単に記してみたい。

これまでの2編の論集『カラムの時代』において扱われてきたのは、近代のマラヤ・シンガポールという社会におけるムスリムの位置づけをめぐる模索であった。西洋的な近代化に危機感を抱いたムスリム知識人は、宗教教育の強化や科学技術の取り込みなどさまざまな方策によりムスリム社会の「近代化」をはかろうとした[山本編2010: 8-9]。同時に、マラヤ・

シンガポールにおけるこの時期は、脱植民地化および独立国家建設の時代であった。彼らは新しく形成された国家、社会の公共領域に積極的に参画し、イスラムや人間集団としてのムスリムの地位を確保しようとした[坪井・山本編 2011a: 7-8]。

本論集の各論において共通して扱われているのは、こうした近代における政治・社会の諸変化に対応するため、個々のムスリムの諸活動を組織化し、イスラムを公的に制度化しようとする努力である。光成論文、國谷論文では家族、婚姻のあり方が論じられ、金子論文では国民教育への関わり方が扱われている。ムスリム個人や家庭に焦点が当てられ、近代的価値観に適応した個人を養成しようとする姿勢が描かれる。一方で、坪井論文では、宗教行政の分野における権限の制度化が扱われ、山本論文では政治団体としての汎マラヤ・イスラム党の組織化が扱われている。これは、イスラムを行政において制度化するとともに、個々のムスリムを組織化により公的な場で力を結集させようとする動きである。

新しい国家的な諸制度、公共の言論空間が形成される過程で、イスラムの諸制度は世俗の諸制度と競合し、それまで干渉されてこなかったムスリムの私的な活動が西洋的な近代主義の立場からの批判にさらされるようになった。これに対して、ムスリム知識人は批判に反論する形でイスラムの独自の制度を擁護する必要に迫られた。ただし、その反論もまた近代的価値観の文脈からのものであり、結果としてイスラムの諸活動の制度化を志向する論調へとつながった。

このため、ムスリム社会内部で見れば、彼らは改革を迫る存在であった。各論では、合理的な制度や個人の権利の確立が強く主張され、既存のイスラムやウラマーなど役職者への批判の姿勢が鮮明である。王権やイスラムの諸制度自体には保守的な見解を示す一方で、行政、教育、家庭などさまざまな制度の合理化や制度内部における運用の改善、指導者の意識変化を求めたのである。

イスラムの諸制度の保守とその内部の改革という一見相反する主張が近代主義のイスラム知識人の大きな特色として浮かび上がる。そのための彼らの戦略は、ムスリム個人に働きかけ、その諸活動を制度化することを通じて影響力を行使していこうとするものであった。ここには、イスラム国家を目指す試みに展望が開けず、国家秩序全体の構想を描きづらくなった彼らがムスリム社会の内部で主導権を握っていく

ための戦略があらわれているといえるのではないか。

これらの事例からは、ムスリム知識人が時代や状況に対応して社会に対してさまざまな働きかけを模索していたことが明らかになる。今後もこうした研究を蓄積し、諸事例をより広い文脈へと位置づける努力を重ねることにより、『カラム』およびそれが発信された社会における時代性を明らかにすることが可能となるであろう。

参考文献

- 坪井祐司、山本博之編2011a『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司、山本博之編2011b『ジャウィを学ぶ』京都大学地域研究統合情報センター。
- 山本博之2002a「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』、20: 259-343。
- 山本博之2002b「ジャウィ綴りマレー語の書き方と読み方: 20世紀マレーシア地域を中心に」『上智アジア学』、20: 359-382。
- 山本博之編2010『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』京都大学地域研究統合情報センター。